



ITSCOM
STUDIO & HALL





Grand Prix

ジャパンレザーアワード 2021

— グランプリ —



FOOTWEAR

フットウェア部門

— ﴿S﴾ ベストプロダクト賞 ﴿S﴾ —

益子実佳さん

MASUKO Mika

宮城興業株式会社

ローカルシューズ2





革靴を美しく光らせる鏡面磨き。今回の作品では紅花の色を革に留めるため、無色のワックスを使用した

素材も思いも、持続可能な靴に

山形牛の革と県花である紅花の染料を使い、郷土愛あふれる作品を完成させた益子実佳さん。気負いなく靴づくりを楽しむ姿勢が魅力的だ。

磨き込まれてつやつやと光る革靴。その色は、橙よりも若干黄みがかっており、日に当たると太陽のようにまぶしく輝く。つくりは堅牢なるグッドイヤーウェルト製法。ドレッシーなストレートチップシューズである。

つくり手は、老舗の革靴メーカー・宮城興業に勤務する益子実佳さん。靴づくりをおぼえた入社1年目から「レザーアワード」への応募を始め、昨年からは地元山形の素材を使った「ローカルシューズ」シリーズの制作に着手。その第2弾となる「ローカルシューズ2」が、みご

とグランプリに選出された。通算5度目の出品だった。

益子さんの創作の出発点は、「自分が履きたいと思える革靴をつくりたい」というシンプルなものだった。

「もともと革靴が好きなのですが、既製品のワークブーツを気に入ったとしても、女性向けのサイズがないことが多くて。だったら自分でつくろうということで、スタートは自己満足の部分が大きかったです」

幸い若手の育成に力を入れている宮城興業では、社長が靴づくりをパターンから個別指導することもめずらし



プライベートの創作を行うのは就業後や休日。会社への事前申請があれば、ミシンなどの仕事道具を自由に使うことができる

くなかった。また、益子さん評するところの「革靴マニア」である先輩たちが、労を惜まず知識や技術を授けてくれた。そうしているうちに、「靴をつくるのがどんどん楽しくなってきました」。偶然知った「レザーアワード」の存在も、モチベーションを一層高めてくれた。

その楽しさをキープしつつ、他者を意識して作り始めたのが「ローカルシューズ」シリーズだ。地元の材料を使い、「山形を離れた人にふるさとを思い出してもらえる革靴」を目指した。東京暮らしの経験がある益子さん

ならではの発想である。素材としては、第1弾から特別にゆずり受けた山形牛の皮をなめて使用しており、今作ではその革を観賞用の紅花の染料で見事に染め上げた。

「趣味で紅花染料を使ったハンカチ染め教室で習ったときに、手がきれいな色に染まり、この染料で革を染めてみようというアイデアが浮かびました。裁断前に革を染料に漬け込むほか、吊り込みなどの各

工程で何度か色を重ねています。紅花は2種類の色素があり、私自身はピンクっぽいままでいいように思ったのですが、周りから『もっと黄色を濃くした方がいい』と言われ、今の色になりました。この色で正解でしたね」

もちろん、ベースとなる靴のつくりも確かである。宮城興業で代々受け継がれる製法を守っており、たとえば履き口はくるぶしの位置に即して外側の方が低くなっている。足の構造を考え抜いてつくるといふ社の哲学を作品に落とし込みつつオリジナリティーを加味している格好だ。また、コロナ禍における計画休業の際、社内で開かれたスキルアップ講座に参加したことも効果的だった。

「先輩たちが講師となり、いろいろな講座を開いてくれました。受賞作では、そこで学んだ鏡面磨きとパティースを活かし、光沢のある仕上げにしました」

まだ見ぬユーザーの顔を想像し、同僚の助言に耳を傾ける。自己満足から始まった靴づくりは、客観的な視座を獲得してその完成度を大きく飛躍させた。山形の風景を心に抱きつつ別の街で暮らす人が自分の作品を履くことを想像すると、「喜びの極みですね」と、笑顔の花を咲かせる益子さん。この作品は、きっと地元の人々にも誇りを感じさせてくれるだろう。素材の使い方のみならず、郷土への思いも持続可能にしてくれる一足である。



上) 赤と黄の2種類の色素を含む紅花。今作では黄色をメインに使用。下) パターン起こし。「ズレは髪の毛一本分まで」が信条

履いた人に山形を思い出してほしい





FOOTWEAR

フットウェア部門

—「§」 フューチャーデザイン賞 「§」—

猪俣真さん

個人

shed sneaker



「脱皮するスニーカー」がコンセプト。表面に使用したレザーが使用するにつれボロボロになり、その下に隠れていたオイルレザーのウイングチップが、染み出したり、浮き上がって見えるように加工してある。食肉加工の副産物である革は、それ自体がエコ素材であり、さらにその革を使うこともエコに繋がるというメッセージを込めている。



BAG

バッグ部門

—「§」 ベストプロダクト賞 「§」—

松村美咲さん

有限会社清川商店

Laura



「手仕事だからこそ扱える素材」にこだわりデザイン・制作。本体にはパーツごとに染色したガラスレザーを、ハンドルには土佐の黒竹を使用。竹という素材と革のマッチングは、竹問屋さんに目利きをしてもらった。デザインのアクセントにもなっている真鍮金具は、ハンドルに合わせたオリジナル。各所熟練した職人たちの手仕事の結集。



BAG

バッグ部門

—「§」 フューチャーデザイン賞 「§」—

牛島淳さん

個人

寄革



革はオンリーワン、厳密な色合わせをしようとする草の選択や歩留りはどうしても悪くなる。そんなデメリットを解消するよう、木工の「幅ハギ」という欠点を利点に変える手法を参考にして制作。出品作は1種類の革でパッチワークのように縫い合わせたが、同じ設計で誰かの制作ヒントになれば革の流通に一役買えるはずとの思いが込められている。



WEAR & GOODS

ウェア&グッズ部門

—「§」 ベストプロダクト賞 「§」—

サイホンハオ
蔡弘灝さん

CAI芸術スタジオ株式会社

十二支ブローチ



型を利用し、一枚の革では想像できない立体感を表現。ヌメ革で成型した立体に、制作者が得意とするレザーカービングをベースにしたシェリダグスタイル技術を加えて制作。安定した品質でスピーディーに量産ができることを意識した制作フローを構築。いろんな革の組み合わせによって、より豊かな表現力が得られる可能性をみせてくれる。



WEAR & GOODS

ウェア & グッズ 部門

—「§」 フューチャー デザイン賞 「§」—

益井隆之さん

TROJAN HORSE

CLARICE



極薄に澆きをかけたホースハイドを使用したレザージャケット。一見普通に見えるが、その特徴は「セーターより軽い重量」と「ポーチに収納できる携帯性」。デザインはクラシックなスタイルだが、軽量かつ小さくたんでポーチに入れて持ち運ぶことができる。重くて、硬いというイメージで敬遠している方にこそ、着て欲しい一品。



FREE

フリー部門

—「§」 ベストプロダクト賞 「§」—

高張創太さん

SOTA LEATHER PRODUCTS

バランスボール



コロナ禍で注目された宅トレ。なかでも体幹を鍛えたりストレッチが気軽にできるバランスボールに注目。インテリアとしても部屋に置きたくなるような遊び心と高級感を兼ね備えた家具をコンセプトにデザイン。触る頻度、使い方、置いた場所によって、艶や色の深みとして美しさを増していく革の特性を意識した。



FREE

フリー部門

—《§》 フューチャー デザイン賞 《§》—

中山智介さん

銀職庵水主

播州白鞣牛革半筒茶碗



皮革の新たな可能性を示した「革の食器」。播州白鞣の床革のみでの成形。優れた保温性、割れず欠けずの強靭性、陶磁器やガラスよりも軽い、使う洗うといった食器としての基本性能はもちろん、安全性や耐久性も両立させた。抹茶碗としてのデザインにも注力し、茶陶に習い実用と審美的観点にも強くこだわった。美しき日本文化と皮革の邂逅。



STUDENTS

学生部門

—《§》 最優秀賞 《§》—

若井田健太さん

多摩美術大学

THL
(The Hardest Leather)



床革とにかわを用いたスツール。強度がでる日本古来の製法である撓(いた)め革を再現。生物から獲れる材を余すことなく活用することでエシカルなプロダクトを実現させた。



SPECIAL AWARD

持続可能なデザイン

—《§》 審査員長 特別賞 《§》—

椎名賢さん

Ken Shiina
Design Laboratory

One Leather, One Cord



一枚の革と一本の革紐だけを使ってつくったバックパック。ミシンも金具も接着剤も使用せず革紐だけでまとめることを目指した。丸革が一枚あればつくることできるバックパック。



2021

応募全作品



SPECIALTY

特選

受賞作品以外にも
審査員たちが特に注目した
個性的かつ秀逸な応募作品。
素材の使い方、コンセプト、
“映える”要素をもつクリエイティブ。



—﴿§ フリー部門 ﴾—

小森匠さん

Masksmith

般若



—﴿§ フットウェア部門 ﴾—

佐藤克己さん

有限会社丸越商事

地球履優 [ちきゅうりゆう]



—﴿§ ウェア&グッズ部門 ﴾—

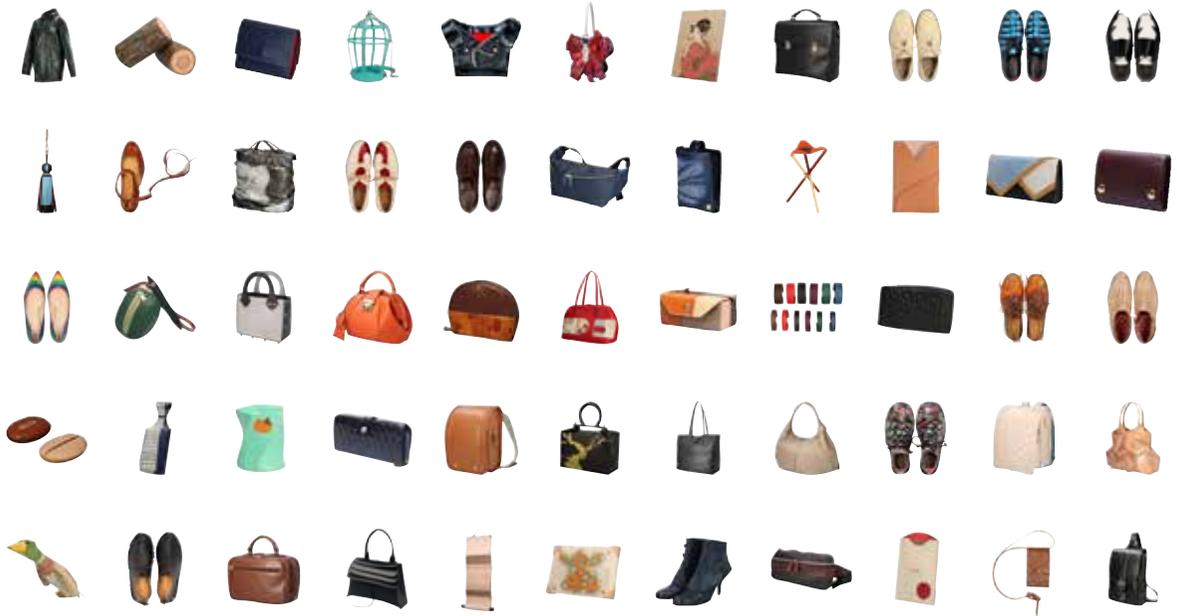
野沢浩道さん

個人

コパノコモノイレ



コロナ禍における募集となった2021年アワード。
 そのなかでも精力的に、先進的に、
 革の新たな可能性を見せてくれた
 ジャパンレザーアワード応募作品たち。



—《§ バッグ部門 §》—

佐藤周平さん

エース株式会社

レザーPCケース



—《§ フットウェア部門 §》—

三浦隆さん

株式会社ストウ

Shoe steaming bye-bye



—《§ フリー部門 §》—

菅野龍雄さん

個人

いやされます



—《§ フットウェア部門 §》—

中井匡志さん

株式会社ハートビート

トラッドショートブーツ
 神戸タータンスタイル



東京藝術大学美術学部教授である長濱雅彦審査員長をはじめ、各分野で活躍する気鋭のデザイナーらで構成された審査員7名の審査と協議により、全222作品の中から受賞作品が決定



二子玉川ライズにて行われた審査会

サステナブルな作品が目立った2021年コンペティション

昨年に引き続きコロナ禍における募集、審査となった「ジャパンレザーアワード」。そんなアドバンテージを感じさせない良質な作品が2021年も集まった。特に例年以上に注目され、多くの作品で意識されたのがサステナブル視点だ。革という素材の在り方、また制作過程、使用想定における持続可能なデザインをどのように取り入れたかが焦点のひとつに。結果、レザープロダクトデザインの新しい可能性を見出した作品が集まり、次につながるであろう価値が、多くの作品に込められた。

Japan Leather Award <https://award.jlia.or.jp/>

